



ニューイヤー名曲コンサート2025

プログラム

2025年を迎えました。今年は“ワルツ王”ヨハン・シュトラウス2世の生誕200年に当たります。そこで前半は、名指揮者達が指揮したヨハン・シュトラウスの名曲の数々をお届けします。生誕150年の1975年にはウィーン芸術週間において多くの演奏会が行なわれました。今日はその中から巨匠カール・ベーム(1894~1981)の指揮した「皇帝円舞曲」とウィーン生まれの名指揮者エーリッヒ・ラインスドルフ(1912~1993)の指揮した喜歌劇「ジプシー男爵」序曲を聴いていただいたあと、1989年と1992年に登場して大きな話題となった名指揮者カルロス・クライバー(1930~2004)指揮によるポルカ「雷鳴と電光」と喜歌劇「こつもり」序曲を。そして最初で最後となった巨匠ヘルベルト・フォン・カラヤン(1908~1989)の登場。コンサートに花を添えたキャスリーン・バトル(1948~)の歌うワルツ「春の声」、そしてワルツ「美しく青きドナウ」で前半を締めくくります。今年没後50年を迎えるショスタコーヴィチは特集を組む予定にしていますが、特集の前に祝典序曲を聴いていただき、後半をスタートします。ロシアの名指揮者ユーリ・テミルカーノフ(1938~2023)がドレスデン・シュターツカペレを指揮した珍しい録音です。南欧のイタリアは多くの作曲家が魅了される特別な国のようで、旅行から得た印象やインスピレーションから多くの名曲が誕生しています。今日はその中からメンデルスゾーンの交響曲第4番「イタリア」を名匠ロリン・マゼール(1930~2020)の指揮で、チャイコフスキーのイタリア奇奏曲を俊英ヴァシリー・ペトレンコ(1976~)の指揮で聴いていただきます。今年もよろしくお祈りします。(中川)

【生誕200年 名指揮者達によるヨハン・シュトラウス2世名曲集】

ヨハン・シュトラウス2世(1825~1899):

皇帝円舞曲Op.437

カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1975.6.15 ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive)

喜歌劇「ジプシー男爵」序曲

エーリッヒ・ラインスドルフ指揮ウィーン交響楽団
(1975.6.4 ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive)

ポルカ「雷鳴と電光(稲妻)」Op.324

喜歌劇「こつもり」序曲

カルロス・クライバー指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1992.1.1/1989.1.1 ウィーン・ムジークフェラインサールでの生中継Live)

円舞曲「春の声」Op.410

円舞曲「美しく青きドナウ」Op.314

キャスリーン・バトル(ソプラノ)
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1987.1.1 ウィーン・ムジークフェラインサールでの生中継Live)

*** 休憩 ***

【没後50年 デイミトリ・ショスタコーヴィチ特集の前に】

デイミトリ・ショスタコーヴィチ(1906~1975):

祝典序曲Op.96

ユーリ・テミルカーノフ指揮ドレスデン・シュターツカペレ(ドレスデン国立管弦楽団)
(2018.6.21 ドレスデンでのLive)

【大作曲家のイタリア旅行から生まれた名曲2曲】

フェリックス・メンデルスゾーン(1809~1847):

交響曲第4番イ長調Op.90「イタリア」

ロリン・マゼール指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(2002.4.7 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

ピョートル・チャイコフスキー(1840~1893):

イタリア奇想曲Op.45

ヴァシリー・ペトレンコ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団
(2011 ローマ、アウデイトーリウム・パルコ・デッラ・ムジカでのLive)

曲目解説

ヨハン・シュトラウス2世：皇帝円舞曲作品437／円舞曲“美しく青きドナウ”作品314

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ“雷鳴と電光”作品324／円舞曲“春の声”作品410

ヨハン・シュトラウス2世：喜歌劇“こつもり”序曲／喜歌劇“ジプシー男爵”序曲

ヨハン・シュトラウスは、「ラデツキー行進曲」等で知られ、すでに世界的に名声をはせていた同名の父ヨハン・シュトラウス(1804~1849)の長男として1825年10月25日、ウィーンで生まれました。父は息子を音楽家にするのを嫌い、銀行に勤めさせましたが、母はひそかにヴァイオリンの稽古を彼に許し、誰も音楽の道に進むことに反対しなくなりました。その後15人の楽員を集めて19歳の時に指揮者デビュー。1849年に父が亡くなってからは、父親の楽団と自己の楽団を合併してますます人気を高め、次々と新作を発表して国外への演奏旅行を試みるなど、確固たる名声を築きあげました。皇帝円舞曲は、以前には1988年のオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の即位40周年記念のために作曲されたと言われていました。しかしその後、この曲は1889年10月、ベルリンの宮廷庭園というレストランの開店記念舞踏会で初演されたことが判明しました。序奏と華麗な4つのワルツ、力強いコーダを持った「皇帝」の名にふさわしい風格を持ったワルツです。1870年に母親が急逝、さらにこの年の7月に弟のヨーゼフを失うと、彼はオペレッタ(喜歌劇)を書くようになります。喜歌劇「こつもり」の台本が成立するまでには「牢獄」という喜劇を基に、台本作家のカール・ハフナーが書いた台本をさらに、リヒャルト・ジユネが手直しするという変転の歴史がありました。「ある公証人のいたずらで、男爵と夫人と小間使い、刑務所長らの間に滑稽なドタバタ騒ぎが持ち上がる」という3幕のこのオペレッタは、1874年に作曲され、同年4月5日にアン・デア・ウィーン劇場で初演されました。オペレッタの代表的な傑作として知られていますが、優美な旋律を交えながら、華やかなワルツやポルカが次々と登場する序曲は特に有名です。「こつもり」と並び称される名作喜歌劇「ジプシー男爵」は、1983年春に知り合ったハンガリー作家ヨーカイ・モールの小説「ヤツファイ」を基にイグナツ・シュニツァーが書き上げた台本を約2年かけて完成させた作品で、1885年10月24日、シュトラウスの誕生日の前日にアン・デア・ウィーン劇場で初演されました。「ハンガリーを統治していたトルコ総監がジプシーとして暮らす娘ヤツファイと、亡命を余儀なくされた豪族の息子、自称ジプシー男爵こと、バリンカイの恋と宝探しをめぐる物語」で、劇中で使われているさまざまな旋律が登場する序曲も有名です。ヨハン・シュトラウスの代表作として知られる円舞曲「美しく青きドナウ」は、1867年、男声合唱と管弦楽のための作品として作曲され、2月に初演されましたが不評だったため、管弦楽用に編曲し、同じ年の5月にパリの万国博覧会で演奏したところ、大評判となり、やがて、ウィンナ・ワルツの代名詞とも言えるほど親しまれるようになります。華麗なウィンナ・ワルツの世界が広がる名作です。1868年に作曲されたポルカ「雷鳴と電光」は、パリ万国博覧会で展示されていたドイツ製の大砲に刺激を受けて着想されたと言われてきましたが、近年では芸術家協会「ヘルペルス」(宵の明星)のために作曲され、最初は「流星」というタイトルだったと言われていています。しかし、雷のとどろきや稲光りが太鼓やシンバルで見事に表現されたこの曲は、「雷鳴と電光」の方がふさわしいと思えます。1883年2月、自身のオペレッタの初演を指揮するためにシュトラウスは、ハンガリーのブダペストを訪れました。リストと同席した晩餐会の席上、ピアノで弾きだした即興的なワルツが円舞曲「春の声」だったと言われます。60歳の時の作品とは思えない若々しいワルツで、後に付けられた歌詞により、ソプラノ独唱で演奏される事も多い名曲です。

シヨスタコーヴィチ：祝典序曲イ長調作品96

1906年9月25日に生まれ、1975年8月9日に亡くなったドミトリ・シヨスタコーヴィチは今年、没後50年を迎えます。改めて特集を組む予定ですが、その前に一曲、祝典序曲を聴いていただき、特集の予告編としたいと思います。この曲は、1947年8月末に十月革命30周年を記念して作曲されましたが、その時には発表されず、7年後の1954年に第37回ロシア革命記念日の祝典のためにソヴィエト共産党中央委員会からの委嘱作品として改作、その年の11月6日、ワシリー・ネボルシン指揮ボリショイ劇場管弦楽団によって初演されました。演奏会当日のわずか3日前に、大至急で序曲を書き上げて欲しい、と打診され書き上げた作品とされています。曲は過去に作曲した自作が引用されている部分もありますが、壮麗なファンファーレから始まり、シヨスタコーヴィチ特有の軽快なリズムに乗って華々しく曲を閉じます。吹奏楽でも盛んに演奏される名曲です。

メンデルスゾーン：交響曲第4番イ長調作品90 “イタリア”

メンデルスゾーンは、富裕で教養ある家庭に育ち、若くして死んだ初期ロマン派を代表するユダヤ系ドイツ人の大作曲家として知られ、多くの分野で名曲を残しましたが、交響曲は全5曲を残しました。メンデルスゾーンは1829年にはじめてイギリスを訪問、翌1830年にはドイツ各地を回ったあとイタリアに向かい、ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマへと回り、ローマには1830年11月1日から翌年の4月10日まで滞在しました。イタリア旅行では古い美術品や古代の遺跡を鑑賞したり、謝肉祭などにも接して、強い刺激を受けました。この時の印象を交響曲にすることを思い立ち、作曲されたのが交響曲第4番「イタリア」です。多忙を極めていたため、創作はなかなか進みませんでした。1832年11月にロンドンのフィルハーモニック協会から交響曲、序曲、声楽曲の作曲依頼を受け、これを契機に交響曲の作曲に積極的に向かうことになりました。こうして曲は1833年3月13日に完成、その年の5月13日に、ロンドン・フィルハーモニック協会の演奏会でメンデルスゾーンの指揮で初演されました。大成功に終わった演奏会でしたが、満足していなかった彼は1837年に改訂しました。イタリアの民族舞曲のひとつで、速いステップで終わりに近づくほどいつそう激しく急速になっていく踊り「サルタレロ」を第4楽章に配した傑作です。

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 第2楽章 アンダンテ・コン・モート 第3楽章 コン・モート・モデラート
第4楽章 プレスト、サルタレロ

チャイコフスキー：イタリア奇想曲作品45

ロシアが生んだ最も偉大な大作曲家チャイコフスキーは、1877年37歳の時に結婚しましたが、わずか2ヶ月で破局を迎え、極度のノイローゼに陥ってしまいます。ひどく衰弱していた彼はまもなく転地療養のためにヨーロッパへ旅立ち、スイスからイタリアに来て、健康もようやく回復していきました。1878年に帰国して新たな創作意欲を燃やし始めたチャイコフスキーは、1879年末から1880年4月まで、再びイタリアに滞在し、ここで作曲に励みました。滞在中にイタリアの風土や文化、芸術に魅了され感銘を受けた彼は、すぐにローマで曲の構想を練りはじめ、スケッチを持ち帰り、帰国後の1880年夏に代表作のひとつ、イタリア奇想曲を完成させました。同年12月18日にモスクワのロシア音楽協会の演奏会でニコライ・ルビンシテインの指揮によって初演されました。曲はイタリア民謡の素材を使い、急速な拍子で踊るイタリア、ナポリの舞曲「タランテラ」を取り入れた、明るく華麗な作品です。